

令和7年度 岡山県立林野高等学校 具体的な学校経営目標・計画

重点目標	関係分掌	課題	方策(具体的取組)	評価基準(評価可能数値)	中間評価	中間進捗状況	評価	年度末達成状況	新年度への課題
1 個別最適な授業や探究的な学びによる、資質・能力の育成	教務部	○生徒が個別最適な学びができる体制作りを行い、授業改善をはじめとする教育活動の改革のイニシアチブをとる。	○カリキュラム委員会・探究創造部と連携し、令和8年度の教育課程改定に向けた取り組みを推進するための機会を設ける。 ○調査・課題の在り方や多様な実践に関する教科間の共有を行う。 ○観点別評価の適正な運用について教科間の共有を行う。	○左記の各項目について年間2回以上行うことができた項目が 3つ(A) 2つ(B) 1つ(C)	B	○カリキュラム委員会は7月までに4回開催し、令和8年度の教育課程を完成させることができた。今後は校内での情報共有を図りたい。 ○他の2項目については、共有会は開催できなかった。職員会議等で啓発を行ったり、機会を見て共有会の開催を検討したい。	B	○カリキュラム委員会は7月までに4回開催し、令和8年度の教育課程を完成させることができた。令和9年度以降の科目選択についても共通理解を図ることができた。 ○他の2項目については、共有会は開催できなかったが、職員会議等で啓発を行ったり、十分な時間は確保できなかったが、一定の成果はあった。	○新課程の実施状況や開設講座数の検討が必要である。1年次生の文理選択や新2年での科目選択の際に学年団と協力したい。 ○成績処理の方法に課題が見受けられる。観点別評価の運用を含め目標設定の再検討が必要である。
	探究創造部	○生徒が作成する探究企画書の聞き取りや助言、生徒が作成する探究報告書の評価やフィードバックを体系化する。	○先進校視察による調査・共有、教員研修会の企画、および外部教育機関との連携を通して、探究企画書・探究報告書の組織的な運用システムを構築する。	○先進校視察による調査・共有、教員研修会の企画、および外部教育機関との連携を年間10件以上(A)5件以上(B)5件未満(C)または、件数に関わらず効果的な運用システムが構築できる(A)	A	探究活動に関する基盤整備として、探究企画書や探究計画書、中間報告書の運用を開始した。外部団体や地域コーディネーターから生徒が直接助言を得る体制が部分的に整いつつある。若狭高校および勝山高校(福井)の先進校視察を実施し、学校ビジョンにおける探究の位置づけや目的、さらに本校林高ゼミの改善点に関する具体的な示唆を得た。県外視察3校、教育イベント参加2回、教員研修会2回、外部機関との連携3件など、多面的かつ計画的な調査・研修を重ね、探究推進に向けた知見を大きく蓄積することができた。以上の取組により、探究活動の制度設計・実施体制の両面で一定の進展が見られ、今後の運用改善と発展に向けた基盤強化が図られたと評価する。	A	探究活動に関する基盤整備として、探究企画書や探究計画書、中間報告書の運用を開始した。外部団体や地域コーディネーターから生徒が直接助言を得る体制が部分的に整いつつある。若狭高校および勝山高校(福井)の先進校視察を実施し、学校ビジョンにおける探究の位置づけや目的、さらに本校林高ゼミの改善点に関する具体的な示唆を得た。県外視察3校、教育イベント参加2回、探究教員研修会2回、外部機関との連携3件など、多面的かつ計画的な調査・研修を重ね、探究推進に向けた知見を大きく蓄積することができた。また1月以降4回の未来林野戦略会議を計画実施し、来年度に向けた教員の目標合わせも行うことができた。以上の取組により、探究活動の制度設計・実施体制の両面で一定の進展が見られ、今後の運用改善と発展に向けた基盤強化が図られたと評価する。	○探究学習への伴走者としての教員の関わり方を教員研修を重ね周知していく。さらに文章化して提示する。
	進路支援部	○「自律的に探究できる生徒の育成」を目指した授業改善を促進する。 ○家庭学習習慣を確立するとともに、課題の個別化を図る。 ○学問や職業に幅広く触れ、キャリア観を醸成する。 ○3年間の見直しをもち、授業・家庭学習・模試・諸活動・進路研究を結びつける。	○教務部、探究創造部、カリキュラム委員会授業改革チーム等と連携図り、授業改革や課題の個別化に取り組む。 ○スタディサプリ等外部教材を効果的に活用し、個別最適な学習を促す。 ○進路行事やLHRを企画し、学問や職業に幅広く触れ、自身のキャリアを考える機会を設定する。 ○学習実態調査を年5回行い、その結果を生徒にフィードバックすることで学習習慣の確立や改善を促す。 ○面談をこまめに行い、実態把握や助言などを行い、生徒の進路意識・キャリア意識の向上を促す。 ○模試の事前事後指導、分析、共有を丁寧に行う。 ○国公立大学合格者を学年の15%程度、就職希望者の合格率100%、全体の進路満足度90%以上を目指し、個に応じたきめ細やかな進路指導を行う。	○学校自己評価アンケート(教員・生徒・保護者)「学校は、授業の内容や指導方法について工夫をしている」肯定率80%以上 ○スタディサプリの自主的な活用(生徒)70%以上 ○授業評価アンケート(生徒)「授業(あるいは単元全体)を振り返る機会がある」肯定率80%以上 ○面談3回以上100% ○進路満足度調査「自分の進路決定に満足していますか」肯定率90%以上 ○進路満足度調査「3年間の自分の努力に満足していますか」肯定率90%以上 ○模試の事前事後指導、分析、共有を丁寧に行う。 ○国公立大学合格者数15名以上 ○就職希望者の内定率100% →A:5項目以上達成 B:3項目以上達成 C:2項目に満たない	B	○学校全体で授業改革や課題の個別化の機運があり、進路支援部としても働きかけていきたい。 ○スタディサプリの自主的な活用(生徒):1年43.1%、2年40.6%、3年52.6%。導入している外部教材をうまく活用できていない。 ○昨年度の反省を活かしながら進路行事等の実施ができた。生徒に目的意識を持たせることに課題あり。 ○学習実態調査3回実施済み。全学年とも増加傾向にあるが、1、2年は2回目から3回目まで減少。結果は速やかに分析、共有し、生徒にも集会や通信によりフィードバックした。 ○授業評価アンケート(生徒)「授業(あるいは単元全体)を振り返る機会がある」肯定率:1年90%、2年89%、3年82%。継続していきたい。 ○面談:2回以上実施100%。引き続き、きめ細やかな面談を働きかける。 ○模試の平日実施、各学年で工夫した事前・事後指導ができた。分析を丁寧に行い、次につなげたい。 ○3年国公立大学志望者20名(合格2名)、就職希望者12名、公務員志望者5名。志望によらず、学校を挙げたきめ細やかな指導をしていく。	B	○学校自己評価アンケート「授業内で生徒が主体的に学ぶ機会がある」肯定率 生徒98%、保護者92%、教員97% ○スタディサプリの自主的な活用(生徒):34% ○授業評価アンケート(生徒)「授業(あるいは単元全体)を振り返る機会がある」肯定率86% ○面談3回以上100% ○進路満足度調査「自分の進路決定に満足していますか」2月中旬実施予定 ○進路満足度調査「3年間の自分の努力に満足していますか」2月中旬実施予定 ○国公立大学合格者数7名(1/29現在) ○就職希望者の内定率100% →4項目達成	○授業を中心として、家庭学習や模試等においても学びの見直しをもたせる工夫が必要である ○個に応じた指導(授業内外)を充実させる ○外部模試の分析と情報共有の方法を再考する ○外部模試の実施や家庭学習のあり方を検討する
	3年次	○個々の進路に応じて必要な課題を自ら組み立てることができる。 ○MDPで自己の進路やキャリアに結び付けて興味・関心を深めることができる。	○MDPで進路・興味に応じた個人探究を行う。 ○個別添削や補習などを早期から体系的・組織的に実施する。 ○主体的な学びに向かえるように共通の週末課題の在り方を改善する。	○進路満足度調査で肯定的な意見が90%以上。 ○授業アンケートで肯定的な意見が80%以上。 ○国公立大合格15名以上(国立大学5名以上)。	B	○授業アンケートの結果は概ね良好である。 ○MDPの個人探究では、1学期後半からやる気を失う生徒が出てきた。中間報告やコーディネーターなども活用しながら個々のサポートを強化したが、半数程度の生徒はまとめで完成できていない。 ○9月検討会後から、学校全体での推薦指導を開始することができた。 ○2学期以降も3教科を中心に週末課題を継続し、各教科で家庭学習時間の増加に取り組んだ。	B	○授業アンケートの結果は概ね8割以上が肯定的な回答であった。 ○MDPの個人探究では、レポートが完成できたのは63名(96名中)にとどまった。 ○国公立大学合格者は1月末現在で7名(国立4名)であり、目標の15名はやや厳しい状況であるが、MDPや探究活動の成果を活かして、岡山大や鳥取大に推薦合格をした生徒もいる。	○探究活動の進捗管理を明確にし、担当者間の情報共有や面談の機会を増やす。 ○総合型選抜に向けた志望理由や活動報告書などの作成指導を早期から実施し、あわせて進路希望に応じた補習や課題を工夫する。
	2年次	○MDPを中心とした、探究的な学びの中で、生徒自身が自分の興味関心について深めることができるようになる。	○MDPを通して、探究活動に必要な基礎・課題設定についての考え方を身につける。 ○MDPの個別探究では、課題設定を通して、自身の将来像や進路選択につながることを意識させていく。 ○MDPを通して身につけた探究活動の基礎等が他教科その他に良い影響を与えることができたかをアンケート等を通して確認する。	○アンケート等による生徒の肯定的な意見70%	B	○MDPの個人研究が2学期に始まった。1学期に学んだ探究活動における基本についてフィードバックしながら、また、必要に応じた進路についても踏まえながら個人探究の課題設定を行っていききたい。	B	○まだ回数授業を残しているため、アンケートは採れていないが、つながられる生徒は、自分の進路や興味関心に合わせ、積極的に活動することができている。 ○それぞれのペースで適宜活動の修正も行えることから、個人探究が始まってから意欲的に進められる生徒もいる。	○アドバイスにしても、課題設定が中々進まない生徒や調べ学習で終わる生徒も多いため、次年度は進路ともよりいっそう総めながら必要に応じたテーマの再設定について考えていく必要がある。
1年次	○学年団全体での生徒理解とフォロー ○MDPを通して、探究の基礎を身につけるとともに、来年度に探究するテーマを設定することができる。	○クラス担任に加えて教科や主任、分掌ごとの面談も実施し、個別アプローチを行う。 ○学年団で97名の探究をサポートし、生徒の個別の関心を把握できる体制やシステムをつくる。	○ピックアップや希望者制での教科面談を重点実施期間を設定し、2回以上の実施 ○年度末に生徒の8割以上が来年度に探究したいテーマを述べるることができる。	B	月に一度学年団会議を開き、生徒情報の共有や課題の検討などが行っている。また、7月記述を受けて教科による面談も始まることできている。	A	○模試を実施した国数英3教科および学年主任による面談を実施した。また、月に一度の学年団会議や回覧による細やかな情報共有を行い学年団全体で生徒の理解に努めることができた。 ○目標の一つの探究については、来年度探究したいテーマの調査を3月に調査予定である。	○引き続き教科面談や主任面談の実施を行う。併せて学年団との情報共有の機会も普段から徹底していきたい。	
2 主体性・協働性・創造性の育成	探究創造部	○生徒が目標を意識し主体性を持って行動することができるようになる。 ○生徒がMDPや課外活動を通してイノベティブな活動・開発ができるようになる。	○質問項目の改善を図り、年度の早いタイミングで、生徒たちに学校自己評価アンケートの質問項目を意識させる。 ○イノベーションルームの効果的な活用方法を対内外に向け広報する。	○主体的に行動できたという意見が50%以上である。 ○左記広報を年間5件以上行う。 2つとも達成(A)1つ達成(B)未達成(C)	A	イノベーションルーム活用事例の広報については、遠隔講義や国際交流、MDP、みまさか学など山陽新聞やみまチャンネルを通じて広く広報した。一方で、地域を巻き込む活動拠点としての運用については研究が進まず、次年度への課題となる。学校自己評価アンケートについては、内容の大幅改訂を行い、本校独自の学びについて直接的に評価できる使用に変更した。主体的な学びに関する項目では「よく当てはまる」47.9%、「やや当てはまる」49.5%であった。	A	イノベーションルーム活用事例の広報については、遠隔講義や国際交流、MDP、みまさか学など山陽新聞やみまチャンネルを通じて広く広報した。地域を巻き込む活動拠点としての運用については事務室と連携を取りながら業者との打ち合わせを行っている。学校自己評価アンケートについては、内容の大幅改訂を行い、本校独自の学びについて直接的に評価できる使用に変更した。主体的な学びに関する項目では「よく当てはまる」47.9%、「やや当てはまる」49.5%であった。	○イノベーションルームを始め、コンホールの使用方法について検討し、校内外に示していく。
	生徒支援部	○生徒が主体的・計画的に学校生活を送ることができる場を作る。	○各委員会、生徒会執行部から学校内に向けた企画や啓発を行う。 ○ボランティアとともに、委員会等の活動記録が残るようフォーマットを整える。 ○内規の見直し	○各委員会、生徒会執行部単位で校内に向けた活動を1回以上行うことができた団体が、 7団体を超える(評価A) 5団体を超える(評価B) 4団体以下である(評価C) ※全10団体	B	○生徒会執行部は全校生徒対象に「意見箱フォーム」を実施し、生徒の学校生活への意見を収集した。また、あがりん祭でのスマートフォンの使用について、主体的に考案し教員に提案した。全校生徒に周知し協力を依頼した。 ○保健委員は「保健だより」や文化祭での教員の防災に関する取り組みをまとめたポスター作成を行った。 ○文化委員による「あがりん祭全校製作」を行った。	B	今年度の活動以下のとおりである。 保健委員 保健だより、文化祭での教員の防災に関する取り組みをまとめたポスター作成。熱中症警戒表示による注意喚起。 図書委員 図書だよりの作成 生徒会執行部 全校生徒対象「意見箱フォーム」の設置。 あがりん祭でのスマートフォン使用についての提案。 文化委員 「あがりん祭全校製作」 交通委員 鍵かけ啓発ポスターの作成と掲示 風紀委員 交通委員と連携し自転車ヘルメット着用呼びかけ運動実施。 通常の委員会活動に加え、6団体が校内に向けた活動を行った。生徒会執行部を中心に主体的な活動となった。	より生徒主体の活動となるよう、年度当初の委員会での年間活動を計画する。 委員会同士で協力した取り組みを行う。

重点目標	関係分掌	課題	方策（具体的取組）	評価基準（評価可能数値）	中間評価	中間進捗状況	評価	年度末達成状況	新年度への課題
	進路支援部	○進路実現に向けて主体的に情報を収集し分析する力および計画を立てて行動する力を育成する。 ○大学や企業等の訪問、対外的な発表、コンテスト応募など、校外での活動を通して経験を積む。 ○キャリアパスポートや活動報告書などに活動の成果や課題を蓄積すると同時に、生徒自身が質の高い振り返りを行うように指導する。 ○3年間の進路指導の体系化	○フォーサイト手帳、Chromebook等を活用して自己管理能力の向上を促す。 ○キャリアパスポートや活動報告書を3年間を通じて使用できるようにすると同時に、振り返りの時間を確保する。 ○進路ニュース等で情報発信やメッセージを伝える。 ○LHR、SHR、年次集会等で旬な情報を発信する。 ○進路指導の取り組みについて、部会議等で企画運営や振り返りを行い、体系的な進路指導ができるようにする。	○学校自己評価アンケート(教員・生徒・保護者)「学校は、MDP(総合的な探究の時間)などの活動により、生徒の『生きる力』や『進路を実現する力』を育てている」肯定率80%以上 ○学校自己評価アンケート(教員・生徒・保護者)「学校は、生徒自ら学び、行動する力を育てている」肯定率80%以上 ○学校自己評価アンケート(教員・生徒・保護者)「学校は、情報提供や生徒面談など進路指導をきめ細かく丁寧に行っている」肯定率80%以上 →A:3項目達成 B:2項目達成 C:Bに満たない	B	○行事等での手帳の活用度は高い、日常的な活用度は個人差あり。 ○1学期末に活動報告書記入の時間を確保した。様式を改良した。 ○不定期ながら、メッセージ性の高い進路ニュースや旬な情報発信ができています。保護者に向けて、校支援を有効活用したい。 ○各学年で体系的かつ工夫したLHRの実施ができています。 ○定期的に部会議を開催できた。議論を重ねよりよい進路指導体系を構築していきたい。振り返りと記録を徹底したい。	A	○学校自己評価アンケート「MDP(総合的な探究の時間)での活動を通して、社会で必要となる力や、生徒自身の進路を実現する力を育む機会がある」肯定率 生徒92%、保護者91%、教員91% ○学校自己評価アンケート「学校行事や探究活動を通して、生徒が主体的な協働性を育む機会がある」肯定率 生徒96%、保護者93%、教員91% ○学校自己評価アンケート「生徒一人ひとりの興味・関心や進路希望に応じた、きめ細やかな支援を受けることができる」肯定率 生徒92%、保護者80%、教員91% →3項目達成	○行事の見直しやブラッシュアップしながら、3年間の進路指導体系を見直す ○諸活動に主体的に関わらせる工夫、振り返りの方法と内容の検討
	3年次	○授業や行事の中で、進んで他者と関わろうとし、多様な価値観を身に付けるとともに、他者を尊重する姿勢を養う。	○様々な教育活動で対話を重視し、活動中に生徒に委ねる場面を増やす。 ○授業や面談などで生徒が発表・プレゼンする機会を増やす。	○生徒の振り返りによる肯定的意見80%以上。	B	○授業アンケートで「自分の考えを表現する」という項目は概ね良好である。 ○担任面談を4回以上実施した。 ○今年度から3年生もOSサポーターに参加した。	B	○授業アンケートでは、8割以上が「自分の考えを表現する」という項目に肯定的な回答。 ○MDPに関するアンケートでは、9割以上が「他者との協働と対話」を実感できている。 ○担任面談を4回以上実施した。 ○OSサポーターや学校説明会などで、3年生が主体的に参加する姿が見られた。	○発表が一部の生徒に偏らないように、様々な場面で対話や発表機会を段階的に増やし、参加しやすい環境づくりと個別支援を工夫していく。
	2年次	○行事を通して、計画性や見通しを持って行動をすることを身につける。 ○新たな自分を発見・創造するために、校内外での活動に積極的に参加する。	○文化の部・体育の部・修学旅行などの大きな行事で自分たちで主体的に物事を決める場面を多く取る。 ○こまめな面談等、生徒に新しい視点や情報をオンタイムで下ろす場面を作る。	○生徒の振り返りによる肯定的意見70% ○部活動・生徒会活動・ボランティア・インターンシップなど校内外の活動を授業時間外で行っている生徒が半数以上。	B	○在籍75名に対し、14名がインターンシップに参加。夏のボランティアに24名が申し込み、3名が9月にGoogle事例校サミットに参加。	A	○修学旅行や学校行事を通し、以前に比べ期限や時間を意識して行動・計画を立てようとする姿が多く見られた。 ○高校生議会、地元CATVでの選挙番組、学校説明会など、大勢の人の前で話す機会が多かった。個別での参加の呼びかけに応じ、前向きにしっかり準備して望む姿が見られた。	○個別の声かけについて、できるだけ様々な生徒が活躍できるように考えてはいるが、よりいっそうの参加を促すための工夫をしていく。
	1年次	○自己理解を深める一歩として授業外の活動へ積極的に参加する。(3年間で3以上の経験！)	○定期的にある活動については担任及び生徒に対して年間を通した見直しを持たせる。 ○掲示や面談などを通し、ボランティアや検定などの課外活動の募集の徹底周知を行う。	○課外活動に1つ以上参加、挑戦した生徒が5割以上となる。	A	現状、課外活動に参加している生徒は学年の7割となっており、目標を大きく達成できている。	A	1月末時点で、学年の約81%の生徒が1つ以上の課外活動に参加(2つ以上が約40%3つ以上が約19% 4つ以上が約11%、のべ数は142人)している。学年で個別に声かけをするなどして、当初の目標を大きく超えることができた。	来年度改めて7割以上の生徒が1つ以上参加している(7割の生徒が累積2つ以上)状態にしていく。
3 異校種交流、地域連携、国際交流等を通じた豊かな人間性の育成	探究創造部	○ボランティアや国際交流、ユネスコスクールを通して生徒が自身の姿に気づくことができる。	○生徒が自分の考え・行動を言語化し、内省することができるポートフォリオを作成する。 ○課外活動、ボランティアについて生徒が成果を発信できる機会を設定する。	○左記の項目について2つとも達成(A)1つ達成(B)未達成(C)	A	課外活動や探究活動、ボランティアを一元化するポートフォリオを外部からシステム導入する方向で選定している。課外活動の成果を発表する場として、ワークショップやイベント出店などを様々な場面で行ってきた。これ以外にも発表や公開の機会を設定していくことが次年度の課題となる。	B	課外活動や探究活動、ボランティアを一元化するポートフォリオを作成し、本校が設置する探究プラットフォームとの接続を計画しているが、ポートフォリオ単体の作成を今年度末までに完了したい。課外活動の成果を発表する場として、ワークショップやイベント出店などを様々な場面で行ってきた。	○ポートフォリオ、プラットフォームの作成 ○発表や公開の機会を設定していく
	生徒支援部	○生徒が小中学校・地域と関わり活動できる場を作る。	○各委員会、生徒会執行部が外部団体と連携をとり活動する。 例) 標語、ボランティア、コラボレーション	○各委員会、生徒会執行部単位で外部団体との活動を1回以上行うことができた団体が、6団体を超える(評価A) 4団体を超える(評価B) 3団体以下である(評価C) ※全10団体	B	○生徒会執行部と風紀委員は美術警察署交通課と連携し、自転車通学者を対象に「ヘルメット着用推進運動」を実施した。 ○保健委員は美術保健所、美術警察署と連携し「薬物乱用防止啓発運動」を行った。 ○生徒会執行部は近隣の商業施設へ出向き、「あがりん祭文化の部」のPR活動を行った。	A	今年度の活動は以下のとおりである。 風紀委員・交通委員 美術警察署と連携した、自転車ヘルメット着用呼びかけ運動の実施。 体育委員 あがりん祭体育の部IPUとの連携 生徒会執行部 高校生議会出席。美術市総合戦略会議出席。あがりん祭文化の部PR活動。 保健委員 美術保健所、美術警察署と連携し薬物乱用防止活動。 5団体が校外の団体と連携し、活動を行った。 昨年に引き続き生徒会執行部が高校生議会に出席し、県北地域の課題について意見を述べるなど積極的な活動となった。	より生徒主体の活動となるよう、年度当初の委員会で年間の活動を計画する。 校外活動への積極的な参加をすすめる、その学びを校内に還元できる仕組みづくりを行う。
4 情報教育の推進とDXを軸とした効果的・効率的な教育環境の確立	教務部	○教務部・探究創造部への分割に伴う各担当業務の整理を行う。	○各担当業務内容の精選を行う。 ○クログブックの共有フォルダやチャットを活用し、業務の負担軽減を図る。 ○必要な資料の検索時間が短縮されるよう、共有フォルダ・校務フォルダを整理する。	○部会でアンケートを行い、教務部会議で情報共有ができ、年度末には教務部の業務内容が整理できたという意見が80%以上(A) 60%以上(B) 60%未満(C)	B	○定期的に行う教務部会議の中で業務の確認などを行うことができた。チャットを活用して情報共有を行うなど業務の負担軽減にもつなげた。 ○年度末に向けて業務内容のさらなる精選を進めたい。	A	○時限内に教務部会議を設け、業務の確認などを行うことができた。チャットも活用して、緊急時の情報共有や簡易な連絡に用い、業務の負担軽減にもつなげた。 ○年度末に向けて業務採用のさらなる精選を進めたい。	○教務部・探究創造部への分割に伴う各担当業務の整理はできた。新年度は教員間の業務の標準化や各係間の協力体制の構築に向けて取り組みたい。
	探究創造部	○保護者が学校での生徒たちの活動の様子を把握している。	○SNS、HP等の活用を通して、外部、内部それぞれに向けて生徒の活動を迅速に伝える。	○アンケート等による保護者の肯定的な意見が80%以上	A	SNSやブログをはじめとする情報発信、校支援アプリを利用した連絡体制の確立は十分に実施できている。一方で、媒体による情報の差別化など着手できておらず今後の課題である。アンケートによる肯定的な回答は「よく当てはまる」40.7%、「やや当てはまる」52.8%であった。	A	SNSやブログをはじめとする情報発信、校支援アプリを利用した連絡体制の確立は十分に実施できている。アンケートによる肯定的な回答は「よく当てはまる」40.7%、「やや当てはまる」52.8%であった。	○媒体による情報の差別化を行う。
	生徒支援部	○効率的かつ一体感のある分掌業務化を目指す。	○紙媒体で行っていた調査、回覧、諸届をICTを活用しより効率的に機能させる。 ○生徒支援部だよりによって他分掌教員へ生徒支援部業務への理解と生徒支援に関する情報提供を行う。 ○校務の流れや反省・課題点などを記録し、次年度につなげられるようにする。	○ICT化した各種申請等をより効率化できるように改善する。 ○生徒支援部だよりを2ヶ月に1回以上発行できる。 ○生徒支援部で共有したシートに行事の反省、改善点を記録する。 以上3点のうち3つが達成できている(評価A)2つが達成できている(評価B)1つだけ達成できている(評価C)	B	○会議資料をクラウド上で作成保存することが徹底できている。 ○学校行事後はクラウド上に反省点や次年度への引き継ぎ等を作成し、業務の効率化を図っている。 ○生徒支援部だよりは今年度作成できていない。	B	○会議資料をクラウド上で作成保存することが徹底できている。昨年資料をすぐに閲覧比較をすることができるなど効率化を図れた。 ○学校行事後はクラウド上に反省点や次年度への引き継ぎ等を作成し、業務の効率化を図っている。 ○生徒支援部だよりは今年度作成できていない。 ○ICT化した諸手続が校内に浸透しきれなかった。	ICT化した諸手続を校内にさらに浸透させ、効率的かつ継続的なものとする。
	3年次	○教員間、生徒・保護者間で迅速で確実な情報共有を行う。	○Googleチャットやclassroomなどのアプリの積極的な活用。 ○資料や教材などの事前配布を行うことでの、様々な業務の効率化。	○具体的な取り組みの実施により、放課後の会議が必要最小限となり、かつ十分な情報共有を行うことができた。年次団の80%が実感している。(中間・年度末アンケート)	B	○学年内でGoogleチャットなどが活用され、会議時間を短縮できている。 ○資料の事前配布までは十分に出来ていない。	B	○日常的にGoogleチャットなどで情報共有を行い、年間を通して定着は見られたが、一部からは確認の習慣がないとの声があった。	○チャットを定期的に確認する意識づけと運用の習慣化を促す必要がある。
	2年次	○教員間や生徒・教員間、教員・保護者間の情報共有を効率的にするために、ICTを上手に利用する。	○効率化に有効な手段・手法の共有や、情報の整理・蓄積により業務の時間短縮・負担軽減を図る。 ○学年通信や進路関係の情報を保護者とアプリやメールを利用しながらオンタイムで共有する。	○効率化・負担軽減等について団所属の教員の8割が実感していることをアンケート等で確認できている。	B	○校支援アプリの開封状況が、これまで使用していなかったため登録者の半数まで到達できていない。 ○修学旅行の連絡を契機により増やしていきたい。	B	○校支援アプリは、案内のみでなくアンケート機能を利用することで開封状況が上がった。 ○学年の教員間の連絡事項は修学旅行を始め、GoogleWorkspaceのチャット機能を利用しリアルタイムで情報共有ができた。 ○2学期以降で学年通信を作ることができなかった。	○次年度保護者にも必ずお知らせした内容等に校支援を活用していくため、数名の未登録の方に一層の登録を呼びかける必要がある。
	1年次	○ICTを活用し、学年団で、学習習慣を身につけ、基礎学力を引き上げる手立てを構築する。 ○学習のみならず生徒が自己の可能性を広げる場をICTを用いて提供する。	○スタディサプリを利用した、中学校までの学習内容の復習や学習習慣を確立する。 ○夢ナビや「じぶんごとナビ」等を活用して、生徒自身の将来の可能性を広げる。	○教員アンケートを行い、5教科でスタディサプリを用いた予習や復習、課題などの学習機会を提供が実施率9割以上となる。 ○夢ナビや「じぶんごとナビ」を活用した進路学習の時間を年間2回実施する。	B	地歴公民科、理科などで課題配信をおこなっている。他教科にも呼びかけを行っている。 進路LHRの確保が難しく、夢ナビの活用はまだ行っていないが、積極的な活用を促していく。	B	○夢ナビの活用は進まなかったが、じぶんごとナビの活用や山陽新聞社の新聞記事検索サイト「キミスタ」の導入など生徒の可能性を広げる機会を多く取り入れることができた。また、キャリアナビを用いた志望理由書指導も3月に実施予定である。 ○スタディサプリの積極的な活用は地歴、理科で行うことができた。その他教科もGoogle Workspaceを活用し、課題の配信など学習機会の提供は実践できている。体育でも動画教材を活用し、授業以外の時間でも生徒に学習の機会を提供できている。	○ICTを活用した課題などの配信を行いながらも、生徒課題が加重負担にならないような工夫が必要である。 ○コンテンツが多様化しすぎているので、何が生徒にとって効果的であり、必要なかの精選が必要である。